

特集 「日中関係の井戸を掘った人々」 第1回

財界人村田省蔵の中国・アジア観

評論家・元金融機関勤務 半澤健市



戦後初期に日中友好の井戸を掘った財界人村田省蔵についてお話しいたします。まず村田省蔵とは何者であったのか。その生涯は企業経営者、政治家兼外交官、A級戦犯容疑者、そして再び財界人という波乱の人生でした。その経歴に沿って村田の人生を述べて、「財界人村田省蔵の中国・アジア観」が浮かび出るようにしたいと思います。

昭和16年12月8日

ここで皆さんに昭和16（1941）年12月8日にタイムスリップして頂きたい。太平洋戦争開戦の報を村田は長江河畔の船上で聞きました。2カ月前まで第3次近衛内閣の通信大臣兼鉄道大臣だったの

が、無冠の財界人となった村田は2カ月間にわたる中国一周の視察旅行の途上にありました。開戦時に日本人全員が一種の解放感または恍惚感に襲われたことは歴史が示す通りであります。村田の回想はその時の気持ちをこう記しております。

「私はそこで考えました。いよいよ伸るか反るか、英米を敵にまわし、開戦となった以上なんとしても勝たなければならぬ。それには挙国一致して結束邁進するよりほかない。われわれもそのために何かお役にたたねばならない。目的はともかく、この際ゆうゆうとして旅行を試みるべきではない。帰国して待機の姿勢をとるべきであると考えまして、直ちに東京に引き返しました。（中国と私『エコノミスト』毎日新聞社、5609

22・1956年9月22日・以下も同様）帰国した村田を待っていたのは東条英機首相でした。近衛文麿の第2次・第3次内閣で陸軍大臣として閣議で村田と同席していた東条はこう要請します。

「満州事変ではすべて軍人の判断によってことが行われた。大東亜戦争はその失敗を繰り返さないために、軍司令官に親任官1人をつけて、その専断に陥らないようにしたい。……村田君、英米のごとき強国を向こうにまわして戦っている私は非常な大責任を負っている。この自分に対して従来のおしきりによって協力の意味でこの仕事を引きうけてもらいたい」（村田省蔵自叙伝）

すなわちフィリピン派遣軍（第14方面軍）軍政最高顧問への就任要請でした。



村田省蔵

これを承知した村田がマニラに赴任したのは42年2月です。マニラは同年1月2日には本間雅晴中将の率いる14軍によって占領されていましたが、米比連合軍はマニラ湾を囲むバターン半島の洋上コレヒドール島要塞で頑強な抵抗を続け、その占領は5月になりました。

本間が戦犯としてマニラで処刑される原因となった「バターン死の行進」はこの時の出来事です。米比軍の司令官ダグラス・マッカーサーは「アイ・シャル・リターン（私は必ず還ってくる）」と叫んで3月にオーストラリアへ脱出しました。日本軍の軍政は42年早々に始まりませんが、それを受け入れたフィリピンの政治、経済はどうであったのか。

政治は「フィリピン・コモンウェルス（独立準備政府）」といって大統領マニエル・ケソンを指導者とし一院制議会をもつ政体であり、米国は46年に独立を承認することを約束しておりました。「米英の邪悪なる植民地支配からアジアを解放する大東亜共栄圏」という日本の思想と行動は、フィリピン人にとっては不要かつ迷惑な事態でした。

経済は1次産品の麻、椰子油、タバコ、砂糖、バナナ、鉱業品を輸出し、工業品、消費財を輸入する、主に米国を相手国とする「モノカルチュア（単一栽培経済）」でありました。

日本軍による軍政は現地の指導者を介して実施されました。逃亡したケソン大統領らは米国に亡命政府をつくります。フィリピンに残留し日本に協力した指導者は本来の忠誠心はケソン政府におき、やむなく対日協力をしているという論理でした。

日本軍政は失敗でした。経済は貿易相手国たる米国を失ったのでモノが売れない、モノが買えない。物資の過剰と不足が発生する。その上、兵站戦略のない日本軍による物資、住宅、食料の強奪や、いたずらな暴力の行使が行われまし

た。これに対してフィリピン大衆はゲリラ組織によって日本軍に執拗に抵抗しました。それにまた日本軍が報復を繰り返すという悪の連鎖が始まりました。

ラウレルが見た大東亜共栄圏

次の対話は日本へ脱出する途上、台湾で足止めを食ったラウレル（日本軍政下の大統領）と村田が日本占領への批判と反省を率直に語り合う場面です。村田が日記に残したものです。

「（ラウレル）率直に云ひ日本は比島人の心理をつかむに失敗せり。比島民衆は此3年間、初めて多数の日本人と接触して残忍なる民族との観念を懐くに至れり。……予（ラウレル）の如き日本を知り日本を理解するものにとりては此事象を戦時中の一現象と見るも、日本は何故に児玉総督が台湾を統治せし方式に則り、力に依らずして比島民衆に臨ませざりしか、之が日本の失敗なりと断ずる所以なり。……併し予としては失望せず。1度蔭かれたる大東亜共栄圏建設の理念は何時かは必ず其萌芽のちえ出る期あるべく、仮令1人になるとも生命のあらん限り、之が実に協力せん。……予（村田）曰く、日本は1億国民の結束に付ては成功しをり

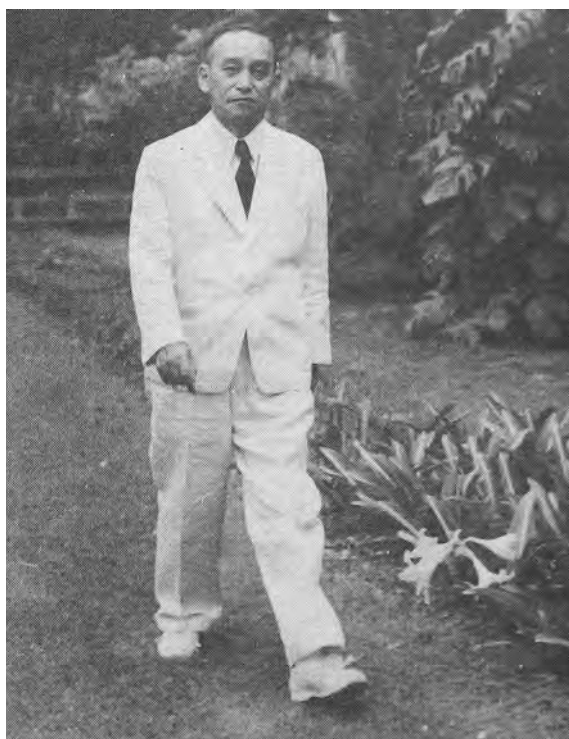
しも、東亜10億の民衆に対する施策に対して欠くる所あるは説かるゝ所の如し。日本としては之を行ふ以前に於て米国の圧迫極度に達し、止むなく立ちて窮鼠の手段に訴へたるを以て用意の周到ならざりしは遺憾なり」(「村田日記」450301、以下年月日のみは「村田日記」)

フィリピン人の対日抵抗についても村田は次のように記録しています。ここの「匪賊」とは抗日ゲリラ活動のことです。

「知るべし軍は過去3年に亘り所在に匪賊の討伐をなすも何等の成績挙げらず、其間敵米国の比島に對する画策到らざるものなく、匪賊は益々其勢力を増大し、1度敵(米軍)の反攻成るや匪賊も民衆も翕然として之を迎ふ。大統領の所謂『民衆にとりては救世主の再来とも見へたるなるべし』の語必ずしも誇張の言にあらず。此現象に對しては如何に陳弁せんとするも事實は事實として認めざる可らず」(「村田

日記」の別冊「比島施策批判」)

太平洋戦争は42年6月のミッドウェー海戦を画期とし、43年のガダルカナル戦の敗北(「転進」)あたりから日本軍は劣勢に転じました。ただマッカーサーが「アイ・シャル・リターン」と言ったフィリピンへの反攻は意外に遅くて44年8月になります。9月のマニラ空襲では日本大使館も爆撃されました。10月にはレイテ沖海戦で戦艦武蔵が撃沈され、連合艦隊の主力は壊滅的な打撃を受けました。航空機が爆装して敵艦に体当たりする航



フィリピン時代の村田省蔵

空特別攻撃(特攻)が開始されたのはこの時からです。村田は神風特攻を知ってこう書いています。

「若鷺連の間には今回白鉢巻隊なるもの出来、戦闘機に爆弾を抱えて体当たりをやるものにて、之を募集せるに1万の若人我も我もと応募を申出たりと、真に涙の出る咄なり、(略)これ日本独特の戦法なるべし、偉なる哉、惨なる哉」(441026)

大使館が攻撃されて危険は村田自身の身辺に迫ります。米軍に空爆されたマニラ湾を見てこう書いています。墓場に突き刺さった商船の中には大阪商船社長としての村田が進水式に立ち会ったものも含まれていたでしょう。

「昨今アメリカの新聞雑誌にはマニラ湾を日本艦船の墓場と題し其写真掲げ居るとのことにつきその実際を見たきためなり。其惨憺たる光景を一目し、無残なる当日惨状を聴き今更の如く茫然たり。予は海岸の邸を去りても、常に艦船並に港湾施設の安全に不^{すなからず}尠^{せう}関心を持ち居りしたため、空爆ある毎に此方面への注意を怠らず、其被害状況に付ても常に探究に勤め居りしが、斯く迄徹底してやられたとの報告に接せず。モヤありて遠望き

かざりしもホテルの海に面する地点を中心として大小艦船30数隻不様な形をして傾斜し、横転し、又沈没しをれり。其内には3本煙突の巡洋艦あり、嘗ては太平洋にて快速を誇りし優秀貨物船金華丸あり」(441204)

村田は様々なルートから敗北確実の戦況と抗日闘争の激しさを知るなかで、理念としての「大東亜戦争」と現実としての「大東亜戦争」のギャップの大きさを肌で感ずることになります。シンガポール陥落の英雄、山下奉文が14軍の司令官として着任したのは44年10月でしたが勝負は既についていました。軍司令部、日本大使館、ラウレル政府はマニラを脱出しルソン島北部のバギオへ退却し、更に北へと敗走します。

村田と実質亡命のラウレルは命からがら帰国します。ラウレルを奈良に置いたあと村田は敗戦までの2カ月を国内の指導者層と精力的に面談を続けます。それは留守中の国内事情聴取、フィリピン戦場の悲惨な実態、終戦工作の模索でした。昭和天皇をはじめ、政治家、軍人、官僚、財界人のトップ数十人との接触で、国内で彼が見たのは方向感覚と判断能力を失い相互に責任転嫁を図るパワーエリート

の姿でした。自らの占領体験を参考にして被占領の構図をどう構想するか。これが敗戦直前の村田を捉えていた心理であるように思われます。しかし村田は9月にA級戦犯容疑者として捕らえられます。近衛内閣の閣僚であったことがその理由であったと考えられます。ここから巣鴨プリズンの2年間の始まりです。

笹川・村田の日記にみる巣鴨プリズンの世俗

巣鴨プリズンの住人を3種類に分けてみます。

第1は平和に対する罪に問われたA級戦犯の被告です。東条英機ほか28名の被告は独房に収容されていました。第2はA級戦犯容疑者で100名以上。第3はBC級戦犯被告とすでに判決のあった受刑者です。主に前線で戦った兵士たちです。平均人数は数百名でピークでは1800名おりました。このように被告、容疑者、受刑者が混在していました。

複数房では、かつての最高指導者と前線の兵士が戦争の実態を語り合う機会が生れました。村田は前線、修羅場の現実をここでも聞くこととなります。収監者には世俗に徹する者と超俗を志向する

者とがいました。たとえば食事の多少という世俗的なことが問題になる。同じA級戦犯容疑者として巣鴨にいた笹川良一は日記に次のように書いています。

「飯盛が少い。残飯にすると喧しい。皆食ひたいが発言が厭である。人の念仏で極楽参りしやうと云う人達ばかり。常に苦言の呈すのは予一人。皆の為に」(笹川良一『巣鴨日記』460206)、「高橋三吉大將をはじめ老人連中は風呂の中で石鹸を顔一ぱいに付けて髭を剃り、剃った髭を風呂の中で洗ひ甚しきに至っては禪の洗濯までなす。自分さえよければ他人の迷惑の如き目の中にない。これが敗戦第1の原因と知った。(略)人間は裸にして見ねば善悪は判らぬ。獄は善悪を試験するには第1の場所である」(『巣鴨日記』460425)

世俗的気分も超俗的精神も同じ人間の中にあります。超俗的というのも、死への恐怖を宗教により克己するという方向もあれば、「あの戦争は何だったのか」という社会的な目で問題を考える方向もあります。村田にも色々な面があります。ここでは彼の「戦争犯罪」、「戦犯裁判」への態度を軸として考察することになります。それは「大東亜戦争」の総括と

も言えます。「理念としての大東亜戦争」と「現実としての大東亜戦争」をどう考えたかと言い換えてもよいでしょう。理念としての大東亜戦争に村田は最後まで固執していました。大東亜共栄圏の理念に疑いを持っていませんでした。獄中で日米弁護士と交わした会話を日記にこう書いています。そこでは満州国すら「永久の傀儡」ではないと言っています。

戦犯裁判に関し―満州国永久の傀儡にあらず

「予は宇佐見に対し弁護士側口述の際又は其他の好機を捉へ是非日本の立場を堂々と述べ事今日に至りたるは止むを得ざるに出でたるものにして遠因する所少なからずとして日本に対する第1次欧州戦争以後の米国の態度より説き起し、極東の和平を樹立するための満州国建国の要を述べ支那の表裏常なき外交を指摘し満州政府必ずしも永久の傀儡にあらざる旨を事実の上に証し今日迄の法廷に於ける好戦的侵略を使命とせる如き誤断に対し一大反駁を試みられん事を熱望している」と云い、ファーンネス（米弁護士）に対しては我等と共に此処にある6百の若者に対する米国の軍事裁判は公正を名とせる勝者の裁判なり：裁判関係者の深き考

慮を煩す旨を力説す、両人之を諒とす、尚宇佐見は其内弁護士側より言はるる如き口述を為す事になりおれりと（461003）

何故に戦敗国のみをさばるか

また東京裁判が勝者による裁きである点も指摘してこう言っています。

「戦争其ものを将来絶滅せんがために戦争に関し行はれし非行を厳罰に処せんとするなれば何故に戦敗国のみをさばるか、戦勝国の行為にして国際法に反し或は人道又は平和に背くものあらば均しく罰すべきものにあらざるか、偶々自国兵の非行を罰せる処刑を如此薄弱なる理由にて減刑するが如き態度は更に我等をして其標榜せる正義人道を疑はしむ」（460602）

ラウレルとの会話でも認めていました。が、村田は「現実」としての大東亜戦争が残酷非情なものであったことをより深く認識していきます。彼は巣鴨で同室となったBC級戦犯被告から現実を聞きましたが、さらに大きな経験はマニラにおける獄中体験でした。

というのは本間雅晴がマニラで戦犯裁判を受けており、村田は46年の1月から2月にかけて、本間の弁護側証人委員として巣鴨から再びマニラに移送されたの

です。その間に、彼はマニラ法廷の被告日本人の通訳、裁判関係者らから戦場の真実を詳細に聞いて記録しています。そこには日本軍の残虐行為や軍内部の混乱、矛盾する戦闘命令などが詳細に記載されていますが、ごく一部を次に引用します。

12歳の小児を刺し殺したるがごとき事実

「彼等（日本兵）は彼等が是なりと信じたる行動に出でたるは事実にて唯軍事上必要以上の程度に出たることに對しては非難に値す、一、二の例を挙げればバタンガスの1部落に於ては村民を1カ所に欺き誘導して予め仕掛置きたるダイナマイトにて一挙に鑿殺（せきころ）（皆殺し）せしが如き12歳の小児を刺し殺したるがごとき事実あり、斯る行為は徒らに出たるものにあらず其環境と当時の事情を考察するの要あり、同時に敗戦の際の將兵の行動は冷静なる平時的判断や勝者の立場より律すべきものにあらざるを知らざる可らず、一言にして言へば彼等は理性を失へるものとも言い得べし」（460214）

其悲惨なる言語に絶す

「（同室者村山らの戦中経験談から得た印象は）戦争末期に於ける我將兵の暴行想像以上に凶悪なることなり、マニラの東方山中に立てこもりし部隊の如きは木

の葉草の根昆虫類を食い尽し人肉まで喰いしもの相当あり、而も味方の同僚を殺し、靴其他の当用所持品を奪い其肉をくろう、既にいずれも骨と皮のみとなりおることと単に股の内側の如き部分に限られ道々見る路傍に三々五々斃れ居る死体は胴より上のみなり其悲惨なる言語に絶す、(略)又一例としてバギオの附近のある金山の隧道の内に傷病兵数千を收容し居りしが転進の際其入口を外より閉鎖したるが如き惨劇所在に行はれ戦死と共に斯くして比島にありし約40万の兵其30万を喪へり。(略)(米軍は適時の判断で降伏するのに比べ)我方に於ては将校たる職業軍人が国民の義務としての大義に基き国防の任に当れる兵に対し其犠牲に関心を持たず之を消耗品視せること単に父兄に申訳なきのみならず人道上許す可らざるの大罪たるべし云々、斯くまでとは想像せざりし予は余りの醜惡なる獸性の曝露に対し均しく日本人として同胞として羞恥の念に堪えざるものあり、「參謀及幹部將校の多くは敗戦思想を夙に有し玉碎は避くべしと云いながら矛盾にも部下に対しては最後まで死守せよとの命令一点張りにて何等計画的指示を与へず後退の時は率先して身の安全を図る等曾ては帝国軍人として其勇武を誇りし彼等

の行動の如何にも解するに苦しむものあり」(460221)

村田省蔵はフィリピンでの自身の体験に加えて巢鴨獄中の見聞からも戦争の真相を詳しく知りその意味を深く考えるようになります。その結論は最後に申しあげます。47年に70歳で巢鴨から釈放されますが、46年に指定された公職追放が解除されたのは51年であり大阪商船の相談役として財界に復帰した時は74歳になっていました。78歳の他界までの最晩年の活動は5年間に過ぎません。

中国への目覚め

その間の大きな仕事は対比賠償交渉の特命全權大使と日中貿易再開の端緒を開いたことでした。賠償交渉は村田で完結せず後に高碕達之助が調印することになります。日中問題に話を絞りますと、村田は53年に「日華経済協会」会長を河田烈副会長に譲ります。この組織は40年に村田自身が作った「長江産業貿易開発協会」の後身で、戦後は台湾政府との窓口として機能していました。ここで村田は商売の相手を本土中国へと転換したわけです。朝鮮戦争開戦から3年、休戦の53年は東西冷戦の最中です。大胆な転換と

いうべきです。彼自身は「転向」をこう回想しています。

「しかし私はそのうちに内省しはじめたのです。中共が少数の共產黨員により指導せられているとしても、6億の民衆がわずか数年のうちに、性格が一変するような民衆になれるかどうか。一体、革命の際には血をみることはいずれの国、いずれの時代においても歴史の示すとおりであって、そういう状態が長く続くものではありません。(略)私はこの際、毛沢東であろうが、蒋介石であろうが、問うところではない。われわれは日本として6億の民衆との友好を深め、広大な中国との接近をはかるべきだと思ったのです」(「村田省蔵自叙伝」)

数字万能の今日、村田の掘った井戸の価値は軽視されがちです。そこで私は4年間の3つの成果を論じようと思います。

第1は、日本国際貿易促進協会(「国貿促」)の設立。

第2は、訪中と周恩来との会談。

第3は、商品見本市の日中相互での開催、です。

日中友好団体は沢山できましたが、国貿促は日中貿易の中心的な窓口となりました。55年1月に訪中した村田は周恩来首相と長時間の会談を行いました。現役

を退いていたとはいえ、戦後初めて周恩来に会った大物財界人は村田省蔵です。彼は大別して3点を言いました。

1つは、「日本国民の中にある疑い」を代弁するという言い方で、中ソ共産党が日本共産党を道具にして革命を輸出しているのではないかということ。2つは、それに対抗するために日本は必要上日米協調路線でゆくということ。しかし3つ目に周恩来の唱える平和共存路線を支持すると明言した上、中国は本土と台湾が統一した上での国連加盟に賛成すると、発言しました。

この年の国内外の情勢は、といえば、米中が直接対決した朝鮮戦争の休戦は僅か2年前のことです。前年に周・ネルー会談で平和共存政策が合意されています。その精神を受けたバンドン会議が4月に行われます。国内では社会党の統一、自由民主党の結成による「55年体制」が秋にスタートします。この情勢下での村田発言は、現実的でありつつ将来展望をもった積極的なものだったと思います。村田の回想による会談の1部を引用します。

村田「日本国民の中にある疑いを率直に披露しました。本日のお話で疑惑もっている人に話ができと思う。(略)戦時中軍事には関係しなかったが、戦前に

は政府の一員であったので贖罪の気持をもっている。若い頃から中国に来て、中国には深き愛着を持っていてので現在の日中関係を坐視するに忍びず、日本国際貿易促進協会を設立して貴国との経済関係の緊密を願っている。私は何も怖れるものはない。アジア人とアジア人とを戦わしめるといのが米国の政策なら反対します。原水爆反対については、私は発起人の1人である。(略)米国の対中国政策で、日中関係が掣肘されることは日本として迷惑千万である」

周「本日のお話は率直であったので誠に痛快である。この態度に敬服する。村田先生と共に相互共通の利害関係問題を見出し得た事は有意義であった。(略)一夕の話で解決しようとするのは非現実的である。村田先生が再び来られるなら歓迎する」(半澤健市『財界人の戦争認識―村田省蔵の大東亜戦争』)

この会談が翌年の両国見本市へと繋が



周・村田会談

ります。

北京の日本商品展覧会

1956年10月6日、北京「日本商品展覧会」(商品見本市)は開会しました。124万人が入場しました。上海は12月に行われ、168万人が入場しました。

村田は「日本国際貿易促進協会会長」兼「北京日本商品展覧会総裁」として北京



1956年10月6日、北京・日本商品展開幕式で挨拶

見本市に主役として参加しました。
会場正面には「日本商品展覧会」の文字と両国国旗（サイズは縦3メートル半、横5メートル）が掲示されており、日中友好を示すスローガン、日本風絵画による装飾などを見て村田は感激します。私は、この日章旗は戦後初めて北京の空に掲示されたものではないかと思っています。

開会前に予告なしに毛沢東が会場へ現れ、村田と宿谷栄一が案内します。あと団長室で約30分間会話をしました。毛は「見本市は日中友好に寄与する。日本の技術に学ばねばならない」、「日本との和は欲するが、困難は承知しているから急ぐことはない。アメリカ帝国主義は困るが人民は別であること。いずれ米国も判るときがくる」などと話しています。毛からは「天皇と鳩山首相に宜しく」との発言もありました。村田は「現在自分は一国民に過ぎず天皇とは直接会う機会がないから伝言はできない」、しかし「鳩山首相へは伝える、首相からも主席に面談の節は宜しくとの伝言があった」と答えました。午後3時から開幕式があり両者の挨拶や祝電披露がありました。8日には、午後4時に周恩来が来館し会場を丁寧回り7時前まで観覧しています。このとき村田は胃ガンに冒されていました。亡くなったのは翌年3月であります。北京見本市では日本の技術者が主導して中国初のテレビ中継が行われました。
(半澤前掲書)

村田の中国・アジア観をどうみるか

結論を急ぎます。村田の中国・アジア



北京・日本商品展会場で毛沢東主席を案内

観はどういうものであったか。村田は中国をよく見ていました。青年社員として10年間、過ごした上海租界の公園には「犬と中国人、入るべからず」と書いた表示があったそうですが、村田も回想にそのことを書いています。彼は中国とアメリカと日本で過酷な国際競争を経験しました。その後、大東亜戦争下のフィリ

ピンで「大東亜共栄圏」の理想と現実のギャップを知りました。

学会の論文は「易しいことを難しく書く」習慣がありますので、私は博士論文に次のように書きました。「村田はインペリアル・ブルジョアジーから平和を求めるブルジョアジーへと転換した」。「インペリアル」の意味は、「天皇の臣下としての」と「帝国主義的な」と2つの意味があります。

「平和を求めるブルジョアジー」とはなにか。それは相手を侵略の対象として見る視線から対等なパートナーとして見る視線をもつようになったブルジョアジーのことであります。彼は長く厳しい戦争体験を通して精神の転換を達成したのです。それは実に大きな犠牲を伴ったのですが。

訪中した年の豪雨の中の国慶節パレードを天安門楼上から観たときの感動を記しています。青年社員村田が10年間見ていた半植民地中国の晴れ姿を彼はどんな気持で観たか。

しかし皆さんはこう問うかも知れません。

日本の財界人は1945年8月15日を境にして全員が「平和を求めるブルジョアジー」に変身したのではないかと。

なるほど形の上ではそう言えるかも知れませんが。しかし戦争から平和への転換には深刻な懊悩や葛藤を伴う筈です。私は村田省蔵の「回心」が真に内面の変化を伴ったものと指摘したいのです。

日本経済新聞に「私の履歴書」というコラムがあります。私はその財界人編の数十編を読みました。管見の限り村田のような内面の葛藤と変化を吐露した人は1人もいませんでした。それどころか「大東亜戦争」について真剣に言及したものすら少なかったのです。

(2013年11月8日・フォーラム)

講師略歴(はんざわ けんいち)

1935年 東京都生まれ

1958年 一ツ橋大学社会学部卒業

野村証券、東洋信託銀行などに勤務

2006年 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

博士後期課程修了

歴史民俗資料学博士

著書 『財界人の戦争認識―村田省蔵の大東亜戦争』

(本号掲載写真は同書より転載)

国際交流委からのお願い

ヤングン外語大に日本の本を送ろう

1月号の根本敬教授の講演でも述べられていたように、ビルマ(ミャンマー)と日本は長い交流の歴史がありました。1980年代末に同国が軍政下に入ってからそれはそれも途絶えがちになりました。

しかし、2011年の民政移管以降、再び経済界を中心に交流が復活しつつあります。大江哲会員は12年夏、同国を訪問し、かの地で没した旧日本兵を慰霊されました。この旅行については、本誌同年11月号に報告を寄稿しておられます。

その後、大江さんは新しい日本語の図書が乏しいヤングン外国語大学の日本語科に個人で図書を送っておられます。協会ではこのほど氏の活動に協力することになりました。

つきましては、会員の皆様に本の寄贈、ならびに図書購入費、輸送費にあてる1口1000円のカンパをお願いしたいのです。

書籍のジャンルは日本の社会と文化の理解に役立つ歴史や文学、テレビドラマ関連、年中行事など日本の風俗紹介、少年少女向け漫画などが、とりあえず適当かと考えます。

本の寄贈、問い合わせは、協会事務局あるいは村田嘉明国際交流委員(TEL090・3042・1693)へお願いします。